

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

#### \* 口径40mmの遠眼鏡収蔵

2010年3月に定年を迎える西野洋平氏から太陽観測所のジャンクの中に面白い望遠鏡があったのでアーカイブスの仲間に入れておいたらどうかと古い歴史的な望遠鏡を託された。古い望遠鏡の多くがそうであるように「真鍮」製で重厚さを感じさせるものである(写真1)。



写真1 40mm屈折望遠鏡

像が逆さまに見えるからケプラー式の天体望遠鏡である。しかし、赤道儀に載せる構造はない。4段の伸縮構造になっており短くして持ち運びできる。4段引き出した時の長さは約75cm、全てを引っ込めた長さは25cm弱である。これだけの長さのある望遠鏡だから手持ちで天体を眺めるのはなかなか難しいと思える。写真2が最も縮めた時の様子である。



写真2 縮めた時の望遠鏡

写真2でわかるように、この鏡筒には文様が彩色されていたように見える。なかなかの作りだったのではないか。この望遠鏡を眺めていて、時折、視野が真っ暗になる時があり、いろいろ覗きまわしているうちに視野に景色が映ってくる。なんとも奇妙な仕掛けがしてあるものだと、その工夫に気付くのにしばらく時間が必要であった。この望遠鏡には対物レンズの蓋があったはずだが、それが無い。接眼部をよく見てみると、何と接眼レンズにシャッターが付いている。このシャッターが望遠鏡の姿勢によって閉まっていたのである。今まで、古い望遠鏡などの器械にいろいろな創意工夫を見てきたが、この細工も創意工夫の一つなのであろう。今までこのような接眼レンズにシャッターがついた構造は見たことがない。接眼レンズが望遠鏡に着いた状態では、普通にはレンズ面が上を向くこと

は無いので接眼レンズに蓋があることも無いのが普通である。写真3（開）、写真4（閉）が接眼レンズのシャッターを開閉した様子である。



写真3 シャッター開



写真4 シャッター閉

写真3、4の接眼部には小さな突起が付いている。この突起を右から下の位置にして眺めなさいとでも仕様説明書のあったのであろう。この機構に気がつかなかった筆者は、時として見えなくなる不思議な望遠鏡だと思っていたのである。

この望遠鏡でまだ天体を眺めていないが、写真5は木の枝を見た視野である。



写真5 窓から見える桜の梢を見たところ

この望遠鏡には、名盤、刻印のようなものが一切ない。来歴を示す情報が全くなく、太陽グループが何度も引っ越しをする間にジャンク箱に納まり、捨てられないで2010年まで生きながらえたようである。購入時には立派な箱に収まり、取扱説明書もあったであろう。

今回、この望遠鏡がアーカイブ室に渡ったので、この先貴重なものとして収蔵展示される幸運に恵まれた。